アブサンと芸術

「緑の妖精」↔「緑の悪魔」
アブサンはなにを象徴したのか？

ニガヨモギ、アニス、ウイキョウなどのハーブを蒸留酒に漬け込んだリキュール。
18 世紀にスイス人医師がニガヨモギを蒸留する製法を発案、
その製法をペルノ社創業者のアンリ・ルイ・ペルノーに売却。
もともとは滋養強壮の薬酒として販売された。美しく透きとおった緑色が特徴。
アルコール度数は高いものでは 70%~80%超のものもある。
↓
1860 年代にはパリ中のカフェ、レストラン、キャバレで提供されるようになる。
午後 5 時以降のことをフランス語で「l'heure verte（緑の時間）」と呼ぶほど、定着した。

「現代生活」の象徴
当初は健康志向の薬酒として発売されたアブサンは、人気女優や芸人たちによる広告宣伝の影響もあってか、
パリのカフェやキャバレで提供される都会的な飲み物として認知されるようになる。

ロートレック考案のアブサン・カクテル
・「tremblement de terre（地震）」
・アブサンとコニャックを 1：1 で配合
・歌手のイヴェット・ギルベールのために創作したと伝わる。

・ほかにも、飲む人の好みやカフェのオリジナルメニューとして、多数のアブサン・レシピが存在した。
・真夜中のアブサン absinthe minuit
　アブサンを白ワインで割る
・ゴミ漁り人のアブサン absinthe de vidangeur
　アブサンを赤ワインで割る。
　歌手アリスティド・ブリュアンの赤いスカーフにちなんだカクテル。

ボヘミアン、芸術家とアブサン
・詩人、作家にインスピレーション（霊感）を与えるミューズとしてのアブサン
・格差、貧困、負のイメージ

アブサン＝新たな芸術的価値の象徴
それまでの伝統的な絵画が扱ってきた神話や歴史的偉人というテーマではなく
＊浮浪者、娼婦など社会の下層にあって見過ごされがちな人々に破滅的な美を見出した
＊「現代生活」を描く＝「現代に生きる我々」が主役

アブサン禁止に至るまで

・1900 年

フランス陸軍の兵舎で蒸留リキュールの提供が禁止

・1908 年

スイスでアブサンを禁止する法案可決（1910 年施行）

・1914 年

8 月 3 日　ドイツがフランスに宣戦布告（第一次世界大戦）

8 月 16 日　フランス政府が国内でのアブサン販売を禁止

アブサン、その後―

・第一次世界大戦後、アブサンに変わってアメリカ発信のカクテルが飲まれるようになる。

・パリ市民の嗜好も徐々に変化する一方、アブサンは戦前の「古きよき時代」の象徴に。

参考文献：バーナビー・コンラッド三世(著)、浜本隆三(訳)『アブサンの文化史』白水社、2016 年